



宮崎大学学術情報リポジトリ

University of Miyazaki Academic Repository

自我幻想の裁き ー「山月記」論ー

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2022-09-21 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 前田, 角藏 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10458/00010395

自我幻想の裁き

——「山月記」論——

前 田 角 藏

序 抑圧する〈読み〉の慣習

「山月記」(一九四二・二、『文学界』)は、「こゝろ」「羅生門」などと共に長く高校国語教材の〈古典〉として教科書に採用され、親しまれて来た。いずれも人間(青年)のうつろいやすい〈内面〉が描出され、自己とは何かを問う生徒(読者)の関心を引き付けて来たからであつた。とりわけ、「山月記」の〈主人公〉李徴の抱えている「臆病な自尊心」「尊大な羞恥心」という分裂的な自我の〈かたち〉は、他者との間に有効な通路を見出せず自閉しがちな傾向にある生徒(読者)の登場によつてますます人ごとでない近しいものとして享受されてきている。しかし、〈主人公〉をめぐるこの享受の環境は、下手をすれば、生徒(読者)を出口なしの袋小路へと誘う危険性があることもまた警告しているであろう。感情〈移入〉の読みで

はなく、感情〈異化〉の読みの方法化が要請されているわけである。

ところで、これまでの「山月記」の〈読み〉は、概ね虎になった主人公李徴の悲劇の中に何を讀むかに集中されてきた。そして、最大公約数的に取り上げられて来た「山月記」の主題は、〈人間存在の不条理〉、〈自我意識の苦悩〉、〈詩人としての悲劇〉であつた¹⁾。もう少し説明すれば、虎になる人間を描くことで作者は、〈人間存在の不条理〉を言いたかつたのだ、いや、弱い「臆病な自尊心」を告白させることで作者は、〈自我意識の苦悩〉を描こうとしたのだ、いや、虎になった詩人が描かれているのだから、作者は自己の体験を踏まえた〈詩人としての悲劇〉を描こうとしたのである、ということになる。たしかに、これらの〈読み〉は、いずれかが正しく、いずれかが間違っていると云つた筋台のものではなからう。作

者はそれらのいずれをも作品に含めたかったにちがいないからである。

しかし、そうしたことよりも、むしろここで問題にしたいのは、こうした、作品から〈作者〉の意図を探りだし、それを作品の主題として押し出して来る正解主義的な主題主義である。それというのも、この主題主義こそ、一義的な読みを誘うことで教室という〈空間〉にいる生徒（読者）の多様な読みを抑圧してきたからである。そして、何よりも、この主題主義——これは、しばしば主人公中心主義的、あるいは、李徴Ⅱ〈生身の作者〉とする私小説的批評と癒着している——が犯罪的であるのは、「山月記」自体が構造として

もともと表層的な解釈を拒否しているにもかかわらずその拓かれた〈可能性〉を抹殺しているということである。

「山月記」を、読者の感情〈移入〉を拒否する感情〈異化〉のテクストとして、まずその〈拓かれた構造〉を説明すること、これが本稿の狙いである。

一 「人虎伝」から「山月記」への変容

周知の如く、中島敦の「山月記」は、唐の時代の「人虎伝」をプレ・テクストにしている。「人虎伝」は、極悪非道の業のため虎になった人間の〈怪異譚〉であった。この〈怪異譚〉の背後には、行いの悪い人間は罰が当たるといふ仏教的、儒教的な文化があり、

「人虎伝」は、この文化伝統を基盤として構築された物語であった。ところで、一九四〇年代の日本の状況——戦中下——を生きる中島敦には、もはや、この文化伝統を共有する地平は失われていた。仮に、プレ・テクストの枠組みⅡ〈虎になった人間の話〉を借用したとしても、虎に変身してしまった理由を〈極悪非道の業〉で説明するわけにはいかなかった。「山月記」を構想する新しい物語の〈作者〉は、新しい虚構の〈整合性〉、〈合理性〉が要請されていたのであった。

一体、「山月記」の〈作者〉は、「人虎伝」の何を変更し、何を省き、何を追加したのであろうか。そこでまず、「人虎伝」のあらすじを紹介しておこう。

〈皇族の子〉であった李徴は、「性疎逸、才を恃んで倨傲」であった。「卑僚」に甘んずることができず、ついに、人との交わりを断った。しかし、やがて生活のため、また官吏の道についた。再び、官吏の道についた李徴は、歓待され、当地から帰京する際には、「獲る所の饋遺甚だ多し。」といった状況であった。ところが、突如、汝水のほとりで、「疾を被りて発狂」し、行方不明になる。従者は、彼の財産を持って逃亡してしまつた。

李徴の友袁修は、公用で出掛けた時、奇怪にもこの虎になった李徴と再会し、互いに喜びあった。虎になった李徴は、虎になりたいききつを述べ、すでに「飢ゑて堪え難し」状況の中で女性を食べた

経験などを話し、虎になってしまった運命を深く嘆き、悲しんだ。運命を呪い、飢えに苦しむ李徴の最大の関心は、妻子のことであった。李徴は、友人袁修に、自分がすでに死亡したこと、今日のこと

は言つてほしくないこと、妻子の生活の面倒をみてくれるよう依頼し、袁修もまた快く引き受けた。この頼みが受け入れられた後で李徴は、袁修に「旧文数十篇」の「伝録」を依頼した。「文人の口闊に列する」ことを強く願望してのものではなく、自分の足跡を「子孫に伝ふる」ためであった。袁修は、李徴の「文甚だ高く、理甚だ遠し」ことにいたく感嘆する。李徴の心境を歌つた即興の「詩一篇」を聞くに及んで、ますます、李徴の「才」の非凡であることを確信する。そこで、袁修は、このようなすぐれた詩文を書く人物（進士）が、どうしてまた虎なんぞになつてしまつたのかと李徴に尋ねた。すると、李徴は、自分がかつて「一婦婦」に恋をしたこと、しかし、それがうまくいかなかつたので一家全員を「焚殺」したことを自白した。

その後、李徴は、袁修が帰途（こ）を通過しないこと、「百余歩」行つた小山からこちらを振り返つてくれること、また再度、今日のことを他言することのなきよう懇請し、お互い悲しみの涙の内に別れる。袁修は林中より踊り出た虎とその咆哮を確認し、再びここを通ることがなかつた。都に帰つた袁修は、訃報を妻子に伝え、都にきた李徴の子供のたつての「柩」の求めに応じて、やむをえず事実

を話し、お金を分与し、妻子を救つた。その袁修は「官兵部侍郎」になつた。

いささか長くなつたが、これが「人虎伝」のへあらずじでである。「山月記」が、「人虎伝」の物語の枠組を大筋のところまで借用していることは明らかである。ただ、微細にみればかなりの部分で組み替えがおこなわれていることも事実である。まず、李徴の出自が、「皇族の子」からある村の出身者、つまり「郷党の鬼才」へと組み替えられている。この出自変更に伴いさらに「詩家としての名を死後百年に遺さう」とする詩人としての李徴が追加されている。こうして、「山月記」では、詩人としての文名があがらず、自己の才能にも絶望した李徴が、生活のためもあつて再び、官吏の道を選んだというふう肉付けされ、さらに、その官吏生活も、「鈍物として齒牙にもかけなかつた其の連中の下命を拝さねばならぬ」ことが、自尊心を傷付け、「狂悖の性」を募らせ、ついには発狂したというようふう膨らむことで、かなりはつきりした詩人李徴の挫折像が打ち出されている。

虎になつた李徴の現状報告の場面では、人の肉を食べた経験を語る「人虎伝」の飢えた李徴に比べて、「山月記」の李徴は、「理由も分らずに押付けられたものを大人しく受取つて、理由も分らずに生きて行くのが、我々生きもののさだめだ」（傍点作者）というように深い存在論的な不安や苦悩を抱えた李徴として定着されてい

る。

ところで、「人虎伝」の李徴は、妻子のことを第一優先にしているが、「山月記」ではむしろそれが逆転している。「山月記」では、詩文の「伝録」と即興詩の後、それも自己の精神の〈病〉を告白した後でやっと妻子のことを依頼するという格好へと組み替えられている。芸術に生きる李徴像の強調のためである。逆転していると言えば、李徴の詩に対する評価もまた、逆転している。「人虎伝」の袁俊は、いわばべたばめに近いが、「山月記」の袁俊は、「この儘では、第一流の作品となるのには、何処か（非常に微妙な点に於て）欠ける所がある」と批判的に眺めている。一体、この変更は、どこからくるのであろうか。

「人虎伝」の物語の〈核〉は、「皇族の子」で、しかもかなり才能もある人間がどうして虎などという「異類」「異物」「異獣」になつたかを道徳的に説き明かすところにあつた。したがって、悪い行いをすれば、かならず報いがあるというメッセージを効果的に語るためには、極端に恵まれた条件を兼ね備えた人、例えば、「皇族の子」、抜群の能力の所有者という条件が必要であつた。しかし、「山月記」の〈作者〉は、極悪非道の業に代わる変身理由を詩人李徴の「臆病な自尊心」と「尊大な羞恥心」に求めており、わざわざ「皇族の子」、抜群の能力の所有者という条件を用いる必要がなかったのである。もちろん、後述するように、ここには〈作者〉の根本的

な批判が含意されていた。

「山月記」では「人虎伝」の〈後日談〉が排除されている。「山月記」の〈作者〉は、後日談をテキストから排除することで、精神の〈病理〉故に虎に変身していかなければならなかった悲劇的詩人の様相を友人袁俊との劇的な再開から別れの緊迫した数時間の中で描き出そうとしたからであつた。

「山月記」の〈作者〉は、「人虎伝」の枠組Ⅱ〈虎になつた人間の話〉の中に、詩人としての李徴像をまず持ち込み、さらに、そこに〈作者〉の生きていた時代の地平や関心であつた存在論、芸術と実生活の問題、自我（性情）の問題を持ち込むことでプレ・テキストを变容している。この変容の論理としての存在の不条理、詩人の芸術と実生活の背反、あるいは自我（性情）の悲劇という精神の〈病理〉が貫徹されることで、「人虎伝」の枠組Ⅱ〈虎になつた人間の話〉が生かされ、現代的な変身譚として「山月記」は蘇つたのである。

これまでいわゆる「山月記」の〈主題〉とされてきたものは、「山月記」という現代的な〈変身譚〉を成立させる一つの虚構条件、素材でしかなかった。今、仮に〈主題〉なる言葉を認めるとして言えば、「山月記」の〈主題〉は、こうした素材の向う側に見えてくはずである。

二「山月記」の〈語り〉の構造

「山月記」の構成は、大きく前段と後段の二つに分けることができる。言うまでもなく、前段は、一般に流布している李徴伝を語る段落であり、後段は、虎になった李徴と友人袁倬との再開から別れの段落である。この構成は、「人虎伝」を踏襲したものである。ただ、「人虎伝」にあった後日談が省かれている。

前段と後段の関係は、一般に流布されていると思われる李徴像と伝記に対して、後段の〈語り〉が修正を加え、覆していくという格好になっている。

今、前段における李徴像とその伝記について整理しておくこと次のようになろう。

李徴は、「天寶の末年」、「若くして名を虎榜に連ね」た「博學才穎」の青年であった。しかし、「性、狷介、自ら恃む所頗る厚」いたために、「賤吏に甘んずるを潔しと」せず、「人と交を絶つて、ひたすら詩作に耽」る。「下吏となつて長く膝を俗悪な大官の前に屈するよりは、詩家としての名を死後百年に遺さうとした」からであった。〈自尊心〉の強さが、「下吏」≡「賤吏」の道に就くことを拒み、詩人として「名を死後百年に遺さう」という壮大な〈夢〉≡野望の世界へと駆り立てたのである。ところが、「文名は容易に揚らず、生活は日を逐うて苦しくな」り、「数年の後」、「再び」、「節を屈し

て」、「一地方官吏の職を奉ずる」。「貧窮」と「己の詩業に半ば絶望」した李徴は、壮大な〈夢〉≡野望の世界から再び「下吏」≡「賤吏」の道に就いたのであった。しかし、かつて李徴が「鈍物として歯牙にもかけなかつた」「同輩」が「遙か高位に進」んでおり、その「下命を拝さねばならぬこと」が、「往年の偶才李徴の自尊心」を傷つけ、ここから、李徴は、「狂悖の性」を強め、ついには「公用で旅に出、汝水のほとり」で〈発狂〉し、その後、消息不明となる。

ここで語り手が提出している李徴像は、〈傲慢な自尊心〉に翻弄された悲劇的な詩人像であり、その伝記の顛末は、発狂、行方不明である。

後段は、この前段の李徴像と伝記に対して、李徴が実は虎になっていたことが〈種明し〉され、しかも前段の李徴像とは対照的な李徴像が、虎になった李徴自らの〈語り〉を通して語られる。

虎になった李徴の〈語り〉は、理不尽にも虎になってしまった身の不条理にどう対処するかをメインにしている。そこには、虎になった李徴の嘆きや悲しみや憤りがあるが、しかし、その感情の起伏も、自らの原因に向かつての〈語り〉の中で、しだいに沈静化し、自己の内なる〈罪〉≡病理が自己告発されてくる。李徴の〈語り〉を通して、存在としての不条理、詩人としての業、弱き性格としての「臆病な自尊心と、尊大な羞恥心」が次々と告白されてくる。そ

れは、「倨傲」、「尊大」という前段の〈強〉の李徴イメージとは異質な〈弱〉の李徴イメージである。李徴の〈語り〉は、前段の語り手によって語られた李徴像とその伝記を覆し、修正を加える構造になつてゐる。この結果、読者は、虎になつた李徴のことを少しも疑うことなく、誰にも理解されなかつた李徴の「傷つき易い内心」を覗き、共鳴するのである。

ところで、後段の〈語り〉は、李徴の〈語り〉によつてのみ成り立っているわけではない。たしかに、前段の〈語り〉との関係で言えば、李徴の〈語り〉は重要であり、読者がその〈語り〉の世界にすんなりと引き入れられる必須の条件であつた。しかし、後段の〈語り〉はいきなり李徴の〈語り〉で始まるわけではなく、まず、友人袁倬が、李徴発狂の翌年、勅命で嶺南に向かう途中、「商於の地」で虎となつた李徴と奇妙な再開を果したいきさつを語る語り手の〈語り〉が先行している。つまり、この語り手の存在を抜きにしては李徴の〈語り〉もまた成り立たなかつたのである。実際、李徴の〈語り〉は、この語り手によって引用されるか、地の文に吸収されている。

それでは、李徴の〈語り〉に優位する語り手とは、何者なのであろうか。

先に、「山月記」では、「人虎伝」にあつた後日談が省かれてゐると指摘した。実は、このことは、「山月記」の〈語り〉を考える場

合、軽視できない意味を孕んでいる。

「人虎伝」では、虎になつた李徴が目撃者たる袁倬に、自分が虎になつたこと、またその虎と不思議な出会いをしたことを一切口外しないよう依頼しており、袁倬も堅くそれを約束しているわけだが、後日談の中で袁倬がやむを得ず約束を破つたことが明らかにされている。ところが、この後日談を排除することになると、一体、「山月記」の語り手は、誰からこの隠蔽されたはずの話を入手したのかという問題が生じてくることになる。そこで、「山月記」の語り手は、一般に流布している李徴伝説を吸収しつつ、「後で考へれば不思議だつたが」という叙述があるように、袁倬の〈後日談〉を前提として、「不思議」だつた袁倬の体験談を袁倬に即して語るといふ〈方法〉を採用しているのである。

それにしても、袁倬の側から、〈超自然の怪異〉の物語が語られるというこの〈語り〉の構造は、必然的に物語の中で袁倬の位置を相対的に上げるといふ結果をもたらしたのであつた。つまり、袁倬に即して〈場面と状況〉が語られていく結果、袁倬は、「人虎伝」のワキ役的な役回りからそれ自体の存在を主張しうる位置へと転換することになつたのだ。そして、この位置転換は、例えば、李徴の〈語り〉に対して単なる聞き手としてではなく、必然的に〈主体性〉を保持した聞き手、すなわち批評的な聞き手となる。たしかに、友人袁倬のこの位置転換によつて、次章で詳しく検討するよう

に、「山月記」では、「人虎伝」とは異質な、全く新しい李徴と袁修とのホットで対話的な友情の空間が構築されたのであった。

三 未明の奇妙な惨劇

袁修は、汝水のほとりて人食い虎となつて生きていた李徴と再開し、数時間の〈会話〉を交わした。たしかにそれは袁修にとつて「後で考へれば不思議」な体験であつた。

再開を果した二人には、共に立身出世の野望に燃えた頃からすれば、決定的な社会的位置の開きが介在していた。「君」||袁修は、「輶に乗りて氣勢豪」であるが、「我」||李徴は、「異物となりて蓬茅の下」にあるというのがまずその一つであろう。李徴は、自己を「詩人に成りそこなつて虎になつた哀れな男」と言い、また「こななき、まじしい身」(傍点作者)として徹底して〈自己卑下〉している。二人の〈会話〉は、こうして李徴||劣勢、袁修||優位の状況のもとで、李徴が「君」を相手として、いわば一方的に、時には激しつゝ、時には冷静に自己の胸の内を〈語り〉出して行く。しかし、この時、袁修は、この虎になつた人間との〈会話〉という「超自然の怪異」を、「実に素直に受容れて、少しも怪まうとしなかつた」。おそらく、この袁修の「超自然の怪異」に対する謙虚な姿勢があつたからこそ、李徴もまた自らの胸のうちを包み隠すことなく〈語り〉させたのであつた。

その意味で、袁修の「素直」な姿勢は、李徴の〈語り〉の不可欠な条件であつた。

さて、李徴は発狂から虎になつていったいきさつを袁修に語り始めるわけだが、この時、袁修の反応を見て話しているに違いない。袁修は、顔の表情や仕草を見ながら会話するわけではなく、その意味で対話場の条件を著しく欠いているわけだが、それでも、李徴の声の抑揚、響きを通してこの会話に参加している。李徴は、虎という不条理な運命に立ち至つたことを呪い、存在の不条理を感じて死を考えたが、その機会さえもすでに奪われていると嘆き、「人間の心」がしだいに失われて行く今の危機的状況を袁修に語る。もちろん、李徴は、自分の中から失われて行くこの不安と絶望の状況が〈語る〉ことで解消するとは思っていない。李徴は語ることで、自己の状況を解剖し、認識しているのだ。李徴は、袁修という聞き手を持つことで、自己内対話に封印された〈言葉〉を外部へと解放することができたのであつた。そして、袁修はと言へば、危機を語る李徴の〈語り〉||嘆きをへふしぎ||「超自然の怪異」としてまだ「素直」に受け止めている。

しかし、袁修は、李徴が、「産を破り心を狂はせて迄自分が生涯それに執着した所のもの」、つまり旧詩の伝録を「一部なりとも後代に伝へないでは、死んでも死に切れない」として依頼するころから、しだいに李徴の〈心〉が見え始めて来る。李徴が「人間の心」

を喪失するのに逆比例して、袁修には正常な人間の判断力がついてくるといふことであろうか。そのよい例が、よく問題にされる「成程、作者の素質が第一流に属するものであることは疑ひない。しかし、この儘では、第一流の作品となるのには、何処か（非常に微妙な点に於て）欠ける所があるのではないか」という袁修の批判的「言辭」である。

李徴は、旧詩の伝録依頼後、一遍の即興詩を作り、誤解された自己の「自尊心」について語り、また、自分が死亡したこと、今日の話は口外しないこと、妻子の生活をみてほしいことなどを袁修に頼む。李徴の「語り」の過程は、一旦は壊れてしまった自己の像をしないで獲得する過程であり、「臆病な自尊心」に翻弄され、人生を「空費」してしまった詩人としての自己像を確立していく過程であった。それは、虎という不幸な運命に殉じていかなければならぬ心の「罪」の発見過程でもあった。もとより、袁修もまた、この「薄倖」の詩人の悲運な運命に同情し、事態を厳肅に受け止めている。ただ、そうした中でも一貫して見詰めているのは、李徴の詩の中に「欠け」ているものは何かということであり、昔と変わることにない「自嘲癖」であった。袁修は李徴の「語り」に同化せず、主体的な判断力を持続している。

ところで、李徴の自己告白が終わった頃から、事態は一変する。この瞬間、二人は全く新しい地平に立たされたのであった。

「自尊心」の強い李徴は、草むらの中に終始隠れて自己を語っていた。しかし、袁修との別れに際してはじめて自己の「あさましい姿」を晒し、「二声三声」の「咆哮」へと向かう。それは、人の言葉が操れ、限りなく人間に近い獣であった李徴の虎への変身の完了を意味しており、そこに現出してくるのは、人間⇨袁修、獣⇨李徴の踏み越えることのできない「溝」の開示であった。

もともと、二人の「会話」は、はじめ、人間と獣の境界がきわめて曖昧なところから始められていた。虎を恐れることなくその声に聴き入るといふ袁修も限りなく尋常な人間感覚からはずれており、李徴もまた人の言葉が操れるといふことで限りなく人間に近い獣であった。ところが、李徴が自分の姿を現す段になるとその「曖昧さ」は消失するのである。そして、それは、これまで流されていた相互の涙が乾く瞬間でもあった。

二人の「会話」は、基本的には、袁修が、「見えざる声と対談」するという形で進められたわけだが、二人の「会話」中、間断なく李徴の涙が流れていた。李徴の「しのび泣きかと思はれる微かな声」であり、「慟哭の声」であり、「堪へ得ざるが如き悲泣の声」である。袁修もまたそれに呼応すべく「涙」を流していた。要するに、再開から別れまで相互の涙が流されている。しかし、この相互の「涙」の交換も、李徴の「しのび泣き」が虎の「咆哮」に変わる時、止んでしまうのである。李徴の「咆哮」は、場面に流されてい

た相互の涙を一瞬にして断ち切り、人間Ⅱ袁修、獸Ⅱ李徴のどうしようもない〈溝〉の構図を構図として差し出したからである。

未明から朝にかけての数時間の〈出会いと別離〉のドラマの帰結は、虎になった人間との〈会話〉というそれ自体ありえない「超自然」的な「怪異」の空間が消失し、そこに人間Ⅱ袁修、獸Ⅱ李徴の「ごく」自然な〈現実〉が現れたことである。「超自然の怪異」の空間において成立していた相互の対話的交流は無残にも断ち切れられ、いわば言葉が介在しえない〈場〉が現出したということでもあった。袁修が最終的に直面したのは、この不条理な事態を現実Ⅱ〈事実〉として受け止めざるをえないという状況であった。ここでは、すでに、対話の〈場〉そのものが解体され、したがって、袁修の抱えていた李徴の「自嘲癖」の問題も、「欠け」る所の問題も空無（宙つり）と化さざるをえなかったのである。袁修は、まさしく李徴を異質な〈他者〉Ⅱ虎として認識するほかなかった。

四 李徴の悲劇

李徴は、虎になった原因を「臆病な自尊心と、尊大な羞恥心」に求めている。それは、「才能の不足を暴露するかも知れないとの卑怯な危惧と、刻苦を厭ふ怠惰」につながり、詩人李徴をして「堂々たる詩家」への道を阻んだものとして認識されている。李徴は、虎という不条理な運命に見舞われた原因を自己の内なるこの分裂的な

「性情」に求め、それを〈罪〉とすることで「悲劇」を自己納得しようとしたのであった。泣き喚いても虎という運命から逃れられない以上、自己納得の論理を構築するほかなかった。

しかし、袁修は、李徴の語る自己像の向う側に、李徴の変わることのない〈自嘲癖〉を見詰めていた。袁修は、自己がもう一人の自己を見詰めてしまうという自己を肯定することのない不幸な自己否定の精神であり、過剰な自意識の持主である李徴を見詰めていたのである。

どうやら、自信に溢れた〈傲慢な自尊心〉の所有者Ⅱ李徴、〈自尊〉と〈羞恥〉、〈臆病〉と〈尊大〉の間を揺れ動くことで確たる自己を定立することの出来ない浮遊する人間Ⅱ李徴、自己否定的な過剰な自意識を抱え込む〈自嘲癖〉者Ⅱ李徴という三つの李徴像が、このテキストから提出されている。言うまでもなく、〈傲慢な自尊心〉Ⅱ李徴は、一般に流布されている李徴像であり、〈自尊〉と〈羞恥〉の間を揺れ動く性情Ⅱ李徴は、李徴自らがその〈語り〉を通して、半ば強いられた形で捉えた自己像であり、最後の〈自嘲癖〉Ⅱ李徴は、袁修の捉えた李徴像であった。

ところで、「山月記」では、この三つの李徴像の向う側にいる李徴はついに捉えられることなく、虎となって〈闇〉Ⅱ森、テキストの外部へと消えて行つたのであった。「山月記」では、強引に対話の〈場〉が解体されることで、読者は統一的な李徴像を持つことな

く、宙に浮かされてしまふのだ。この事態こそ、「山月記」の〈別離〉の場面の読者論的立場からの意味である。

李徴とは何者か、こう読者は自らに問うしかない。

一体、虎になった李徴という人間は三つの像のどこにいたのであろうか。

まず、李徴の本質に迫るキーワードである〈傲慢な自尊心〉、〈臆病な自尊心〉と〈尊大な羞恥心〉、〈自嘲癖〉なるものについて考えてみよう。結論的に言えば、これらはいずれも李徴の本質であったということであろう。それと言うのも、それらはいずれも、人間が他者との関係の中で取る一つの反応、表情であるからだ。したがって、ここで問題になるのは、自我があるとか、ないとか、あるいは分裂しているとか弱いかどうかではなく、他者との関係性の中でそうした反応、表情を示す李徴の自我それ自体の〈かたち〉構造ということになろう。

李徴は、「郷党の鬼才といはれた自分に、自尊心が無かつたとは云はない」としながら、その自尊心は「臆病な自尊心」「尊大な羞恥心」であったと〈弱き〉〈分裂的〉「性情」分析を試みた。しかし、ここで、誤解を恐れずに言えば、李徴の自我を根本的な所で規定し、支えていたのは、「郷党の鬼才といはれた自分」、つまり俺鬼才という思い込みであった。この傲慢とも言うべき〈思い込み〉こそ、官吏に登用されて地方にまわされた時、一つの試練に直面し

たのであった。このいわば俺鬼才という思い込みは、〈村〉の人間関係の中では齟齬や矛盾をきたすことがなかった。しかし、〈都市〉の新たな人間関係の中に投げ出されるや否や、早くも挫折を強いられたのであった。ところが、李徴は、現実を直視する代わりに、詩人として名を百年後に残すという〈夢〉野望の中へこの俺鬼才という思い込みを無傷でスライドさせてしまったのであった。もともと、思い込みは思い込みでしかないから根底がなく、たどころに自信（尊大）と不安（臆病、羞恥）と自嘲の間を浮遊させられてしまう。実際、この傲慢な〈思い込み〉は、たかだか数年の詩人としての習練にも耐えられず、今度は絶望へと振られるという案配であった。李徴をして「臆病な自尊心と、尊大な羞恥心」へと発動させてしまうモノ根拠こそ、俺鬼才という幻想であった。これこそ、李徴をして、「進んで師に就いたり、求めて詩友と交つて切磋琢磨に努めた」りすることも、また、「俗物の間に伍することも潔しとしなかつた」のである。

そもそも、俺鬼才という幻想〈思い込み〉は、たえず〈他者〉との関係性において優位に立とうとする上昇的心性を内包している。それは、必然的に、〈他者〉なるものを上、下の関係性の中でしか意識できず、またそこでしか生息することができないのだ。しかし、李徴は、その生息すべき〈場所〉をあの前にもっと早くに辞した時にすでに喪失していたのであった。だから、この幻想〈思い込

み)は、他者への過敏な反応を強いられつつ浮遊するほかなかつたのであった。

さて、ここで、李徴には、詩的表現に生きなければならぬ内的動機があつたのだろうかと問うてみる事ができよう。なるほど、李徴は、「産を破り心を狂はせて迄自分が生涯それに執着した」旧詩にこだわり、「一部なりとも後代に伝へないでは、死んでも死に切れない」と言っている。しかし、もともと詩人への動機は、下吏に甘んずることが出来なかつたからであつた。一時期、文名が揚がらないため生活に窮して再び官吏の道に就いたが、これとても、基本的には詩にこだわらざるをえない内的動機の不在が大きな原因であつた。実際、文名が揚がるという条件があれば李徴の人生の再転向も、また発狂から虎への変身という悲劇もなかつた。要するに、〈思い込み〉に翻弄されての詩人としての出発であつたところに李徴の悲劇の原点があつたのだと言えよう。

しかし、李徴の自己言及にはこの点への考察が決定的に欠落しているのだ。李徴は、「詩家としての名を死後百年に遺さうとした」詩人であつた。しかし、一方で、「己の詩集が長安風流人士の机の上に置かれてゐる様を、夢に見る」俗的な詩人でもあつた。ここには、〈名声〉につき動かされ、揺れ動く詩人李徴がいる。ここには、〈何故、書くのか〉〈何故、詩人なのか〉と問ひかける李徴がいないので、〈他者〉の評価に異常に敏感になり、翻弄されて生きる李徴

がいるのみである。なるほど、「飢を凍えようとする妻子のことよりも、己の乏しい詩業の方を気にかけてゐる様な男だから、こんな獸に身を墮すのだ」という告白があるように、「人間」的でなかつた自己は意識されている。しかし、李徴はついに己の悲劇の原点に言及することはなかつた。虎になつてすでに己のアイデンティティの根拠たる俺^レ有能という〈思い込み〉が崩されているにもかかわらずである。

袁修は、李徴の〈語り〉を通して、李徴の昔と変わらない〈自嘲癖〉を「哀しく」見詰めていた。この時、袁修は、このかわらぬ自嘲癖の向う側にいつもいたであろうあの俺^レ鬼才という〈思い込み〉に生きる李徴をも眺めていたはずである。袁修は李徴が〈政治〉から〈文学〉へ、そして再び〈政治〉へと転向したこと、さらに発狂するまでに追い詰められた来歴をすでに知っていた。しかし、袁修は旧詩の中にその来歴からくる苦悩の跡を認められなかつた。おそらく、これが、袁修の「この儘では、第一流の作品となるのには、何処か(非常に微妙な点に於て)欠ける所がある」の批評につながっているだろう。袁修は、生の痕跡を留めない旧詩を通して、この詩人の表現の内的動機の欠如という核心に触れていたのであつた。

もちろん、袁修は、虎になつた「薄倖」の詩人^レ李徴に強く心を打たれ、その別離を深く悲しんでいる。しかし、それにもかかわら

ず、この巨大な〈思い込み〉に幻想に翻弄された詩人李徴を〈第一流〉から外し、「哀しく」眺めている。そのまなざしは、虎になつてもまだ表現の内的動機、すなわち自己表現を獲得するにいたらぬ詩人李徴への埋葬者という感じがする。言うまでもなく、このまなざしは、袁徴の向う側にいる「山月記」の〈作者〉のそれでもあつた。

「山月記」は、俺〓鬼才という思い込み〓幻想に翻弄された詩人李徴を虎に変身させ、またその悲劇の現場に友人〓人間〓袁徴を立ち合わせることで、人間の自我幻想そのものを裁くという非情な劇であつた。言うまでもなく、李徴の抱えた〈病〉〓幻想は、官吏としての立身出世コースを行く袁徴もまた共通に抱えていた。袁徴は、虎として裁かれた李徴の姿の中に己の悲劇の可能性さえ見ることができた。なぜなら、袁徴もまた李徴〓虎の悲劇を人間〓袁徴として立ち合わせられ、いわば悲劇を共有するという苛酷な場面に立たされてきたからである。袁徴が森の中に消えて行く虎〓李徴に見たものは、俺〓鬼才という途方もない自我幻想にとりつかれて、取り返しよらない失敗をした一人の人間（自己）の姿であつた。

しかし、「山月記」の〈作者〉が裁こうとしたのは、劇中の李徴や袁徴の自我幻想だけではなかつた。李徴を虎に変身させることで、自我幻想に取り憑かれた己をも含むすべての人間を裁こうとしたのであつた。「山月記」には「人虎伝」が極悪非道の業を虎とし

て裁いたのとは異質な〈裁き〉が込められていたのである。そして、そこにこそ、この現代的な〈変身譚〉たる「山月記」のまことに優れた〈小説性〉が込められていたのであつた。

〔注〕

(1) 例えば、分銅惇作氏の「作者中島敦がこの作品で見すえたものは、単に人間存在の不条理や自我意識の苦悩だけでなく、詩人としてのおのれの存在に本質的に内在する悲劇性、芸術に生きることの苦悩そのものではなからうか。」(『山月記』——教材の扱い方と実践授業の展開、宮崎健三編著、「小説の考え方」、一九六八・一一、右文書院、所収)という〈評言〉の中に三つの主題がすでに出揃っている。

(2) 中村光夫氏の「中島敦論」(一九四三・四、「批評」)は、中島敦論の早い時期のものであるが、氏はそこで、中島にとつて「製作とは或る素材の裡に彼の感受性を生かす試みであつた」と指摘し、中島敦の特殊の自我からくる〈生の孤独〉を早くも作中の主人公の中に読み取るといういわゆる私小説批評的な〈読み〉の傾向を示している。

(3) 李景亮撰「人虎伝」のテキストとしては、『太平広記』系のものと、これに後代の人が書き加えた『唐人説書』系の二種類がある。中島敦が使用したテキストは、後者で、引用もこのテキストによる。

(4) 佐々木充氏は、『中島敦の文学』(一九七三・六、桜楓社)所収の「山月記」——存在の深淵——の中で、「山月記」を「物語りの奇異性、非現実性の構成を一方の目的とした作品であること」の前提から論を立てるべきであるとし、作者と主人公を地続きで論じてしまう研究状況へのラジカルな批判を展開している。

(5) 饗庭孝男氏は、「空想と言葉との織物——中島敦」(『昭和文学私論』、

一九八四・二二、小沢書店) 中で、「作ル」とは、「我」を見せることであり、「述べる」とは「我」をかくすことだ」と言い、『弟子』『山月記』『李陵』こそは、この「述べる」方法によったものであり、「この「我」離れこそ歴史物のなかにおける、中島なりの「夢」の再生であった」としている。

(6) 菅野昭正氏は、「忘れられた胎児——中島敦『北方行』」(『小説の現在』、一九七一・七、中央公論社) 中で、「物語の空間の枠を鮮明に輪郭づけることを強いられる」中島の小説方法は、「中枢観念の図形をおのずから凝結させる効果をうみだすと同時に、物語の空間を狭く閉ざす逆効果の作用も孕んでいた」として、「山月記」の抱えている小説の方法自体を問題にしている。

(7) 勝又浩氏は、『中島敦』(『作家と作品シリーズ』、一九八四・七、有精堂) の中で、「李徴という爆弾をいつも抱えていた哀慘、それが『山月記』を書いている人・中島敦であった」と指摘している。なお、ここでは、「彼の不幸とは、実のところは、彼が気のやさしいヒューマニストであったが故の悲劇」「なまじ「人間性」があったが故の悲劇」であつ

たとする李徴像が展開され、従来の李徴像が大きく転換させられていく。

(8) この点について、例えば、鷲只雄氏は、「山月記」私見——「欠ける所」他をめぐって」(『中島敦論——「狼疾」の方法』、一九九〇・五、有精堂所収) の中で、これまでの解釈の主な四点を紹介しながら、まず、李徴は、悲劇の主人公であり、それには「才は一流、非凡な詩才」ということが「必須の条件」であったと言い、しかしそれが一方で認められなかつたわけだから、「辻褄が合わない」。そこで考えられた「苦心の成果」がこの批評の言葉であったと述べている。

(9) この点については、昆隆氏が、「山月記」読解」(一九八五・六、『日本文学』) の中で、李徴「亡霊」説のもとにやや異つた見解を述べている。

※「山月記」本文の引用は、『中島敦全集』第一巻(一九七六・三、筑摩書房)によつた。

なお、旧字体は新字体に改め、ルビは省いた。

—— 錦城学園高校教諭 ——